

日本醫史學雜誌

第6卷 第4号

昭和31年8月15日発行

原 著

元祿前後における医学教育の一端……………伊良子光孝…(1)

梶原性全の生涯とその著書(2)……………石原 明…(7)

報 告

蕃書取調所旧蔵和蘭医書目録……………大島蘭三郎…(31)

史 料

錦小路家文書(2)……………山崎 佐…(36)

雜 報

人事消息……………(29)

新刊紹介……………(29)

編集後記……………(38)

通卷第1342号

日 本 医 史 学 会

東京都板橋区大谷口町724

日本大学医学部内山生理

振替口座

東京15250番



新型V.B₁製剤

アリナミンは従来のV.B₁剤に比べて次の特長がある。

- ① 体組織との親和力が強く、各臓器中へ高濃度に移行し、長時間体内に留り作用する。
- ② B₁の血中濃度は勿論、血球中濃度も速かに、著しく上昇する
- ③ コ・カルボキシラーゼになり易い
- ④ 服用量に比例し殆ど吸収される
- ⑤ アノイリナーゼ(B₁分解酵素)で破壊されない。

神経痛・リウマチ・神経炎・手術後の神経障害
顔面神経麻痺・視神経炎・脚気・脚気様症状・食欲不振・便秘・疲労回復

アリナミン^{「タケタ」}

注射液 (1CC=5mg) 10管・50管
糖衣錠 (1錠=5mg) 30錠・100錠・300錠

大阪市道修町 武田薬品工業株式会社

元祿前後における医学教育の一端

伊 良 子 光 孝

原始時代より、疾病の治療法は勿論、健康の保持生命力延長法策等については、人類最大の関心を以て、長年に亘る経験と学術の進歩は併行して、その方法については、絶大なる努力を払つて来た事は、洋の東西を問わず今尚變りのない所である。却ち、卜占・禁厭、次では草根木皮・動物鉱物等諸種の試練は、時代の推移と共に人智の發達に伴い、学術化し漸次医療に関する形態を構成し医学の基礎を導き、引いては社会に伝撒し弘く流布する態勢を執り医学に関する教育の端緒を拓きたる方途は、歴史の物語る処である。「十八史略」巻頭に神農氏は『草を嘗めて一日に百の毒あり』と四千年前に喝破し、また秦の始皇帝は、阿房宮裏に不老長寿不死の靈草を夢み、また我が国においても神代に大那牟智命は医療を教ふとあり、また西洋においてもヒポクラテスの有名なる史実あり、特に我国においては

有史以来応神天皇十六年（西紀二八五）百濟の王仁、来朝し支那の文化を始めて輸入し、允恭天皇三年（四一四）の頃には韓の医方伝わり、また継体天皇七年（五一三）には支那より召に応じて段楊爾来朝し、医学及び医療を講じて医学の普及につとめた。殊に大宝二年（七〇二）大宝令の発布を見たることは我国画期的發展の証左であり我が国建国の基礎を確立せる一大事業と謂わねばならぬ。翌三年（七〇三）には学制を定め大学及び国学を置き、また医師の名分を明かにし医学教育の制度も樹立したと記してある事實は、特筆するに余りある次第で、またその他文物制度教養等悉く唐制を移して以来、春秋を閲すること約一千二百年間、ただ伝統を守り來つたのである。

しかるに正親町天皇の御代永祿十一年（一五六八）織田信長の安土にポルトガル宣教師を引見せし以来ポルトガル

の文物輸入され我が国の文化に大なる革新を致し、特に医学術所謂南蠻流外科の滲透によりて在来伝統の誇りとせる医学に一大動搖を来し、一の混乱を来せることは周知の事実であり、また一面我が国医学に画期的進歩をもたらした豪華版とも謂うべきである。

爾来永年の伝統を継承せる支那医学と西欧医学との離反または融合折衷によりて一流一派を考案創設して名をなし、また社会に裨益する者が輩出したるが、当時医学教育に關しては未だ系統ある制度もなくただ医学を志す徒輩はこの一流一派を樹立標榜せる医師の門を叩き、伝授を乞ふことによりて医学を修得せるものにして、一の私塾による医学教育の段階を築きたり。徳川時代特に中期に至りては一流派を起せる者多しと雖も容易に伝授を得ず、当時の時代風習として、堅き師弟の契約は勿論、厳格なる条件の下に入門を許されたる者は、一定年限理論と実習臨床実験は勿論、一流の流義を伝授体得し、茲に初めて医師としての許容と免許を得て販省し各藩医にまたは市医として診療に従事したるものなり。

今茲に元祿十年（一六九七）以降弘化三年（一八四六）に亘る一百五十年間、京都を中心としてその例を我が先考

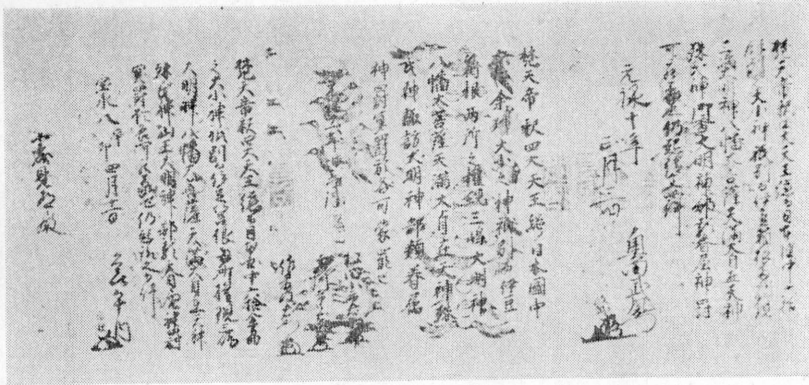
伊良子道牛が創造せる伊良子流外科伝授の模様を述べて、当時における医学教育の一端を述べんとする。

因みに、伊良子流外科は我が中興の祖道牛が、長崎において当時のカスバル流外科を習得して、元祿八年（一六九五）京都伏見銀座十一丁目において、また傍ら伊藤仁齋の門を叩きて儒学を修め、医院の堂号を見道齋と称し、一般の診療を開始した。爾来将監、光頭、光慶、光道の四代弘化年間に至る。特に後桃園帝以来光顯は、典藥寮瘍科医師に抜擢採用せられてより我祖父光信に至る明治初年におよぶまで典藥寮医師として貢献せることは周知の事実である。また弘化以来明治初年に至る光教、光順、光信、代々引続き私塾を開き医者に努めた。免許を受けたる修得生は、東に江戸・駿河・相模。北は越後・佐渡・北川。西は長州・防州・芸州。南は九州特に日向・佐賀、また四国一円に亘る殆んど当時の日本全国の諸地域に涉りたる二百三十二名（後記起請文のある者）の篤学の門弟である。尚弘化以後明治に至る約百名の起請文を蔵す。

一 元祿当時における医学界の展望

世は挙げて鎖国の制を厳守し、ただ西洋の文化は僅に長崎を通して和蘭文化の一部の移入を見るのみにして、医学

(第一図起請文、第二図誓約書参照。)

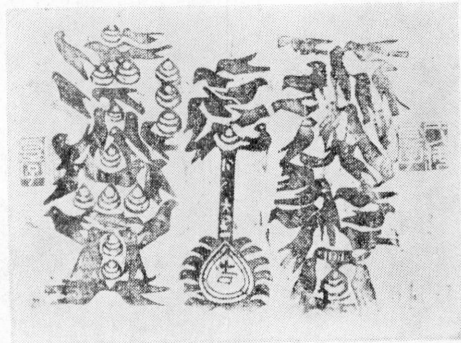


第2図 誓約書

尚この誓約書を認むるに用紙として熊野牛王宝印(俗称熊野護符)を以てせり。

この熊野護符に認めて契約したことに万一違約した場合は、神罰により血を吐いて死すといひ伝えられる物にして古来史実に明かである。

彼の吉川英治氏著「新平家物語」にも三十年二月二十七日発行の「週間朝日」にも、田辺の堪増がこれを用い



第3図 誓約書裏面(熊野護符)

て誓約したとある。この熊野護符は八咫鳥を以て呪文を書いた物である(昭和三十年九月一日発行京都国立博物館監修「医学に関する古美術聚英」第七十号載)なお第三図参照。

起請文の形式を示すと

起請文之事

- 一、御一流外科并本道家依懇望御書物並秘密之口伝御伝授被下候上者好身之者不及申親子兄弟同門之者たり共一切他見他言不仕勿論以御陰後に至外科熟習仕候共御許免無之内御当院は不及申他所にても猥に療治仕申間敷候例へ療治の儀御免許被下候供猥りに弟子を取御伝授の趣を少しにても堅相洩し申間敷事
- 一、他流合致合休一流相企申間敷候事
- 一、外科の儀に付御流儀の外私身終り候共堅他流を相学申

間敷事

一、御勤申上候内何ヶ年にては御家法堅く相守申可候并私力の及候程にも誠直に相勤可申候譬後日迄飯郷仕候ても御用の節は何時にては早速罷越可申候事

一、調合場において万事不敬無之対病人衆不礼粗末之儀無之様可仕候其余万事に付御差凶之趣少々にては相背申間敷事

右条々之趣相於背者

梵天帝釈四大天王、総而日本國中六十余洲之大小神祇別而伊豆箱根両所権現三嶋大明神、八幡大菩薩天満大自在天神殊氏神□□御香大明神部類眷属神罰可蒙者也、仍起請文如件

年号 年 月 日

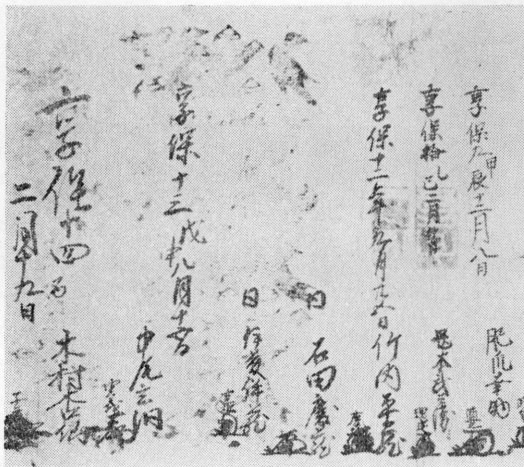
姓 名 花押血判

伊良子大先生

因みに文化年間（一八〇五頃）観血の手術、特に全身麻酔を以て有名なる紀州の華岡青洲（宝曆九年——天保六年）は道牛の孫弟子であることは浅田宗伯著「皇国名医伝」中に明白なる事実で、文中青洲の師は泉州の大和見水であることが記載されている。これによりて道牛の手記古記録を閲するに、大和見水

は本名伊藤伴蔵方矩といひ駿河の産、享保十二丁末年九月二十五日（一七二七）入門、一流の外科を修得し、『見』の一字を許され大和見水と改め京都鶴小路夷川上ル東側に居住す、後景州岸和田候に召され仕官すとあり。

伊藤伴蔵手記起請文血判写真真四及び道牛手記写真真四参照。



第 4 図 護符起請文に自署血判せるもの伊藤伴蔵の名がみえる

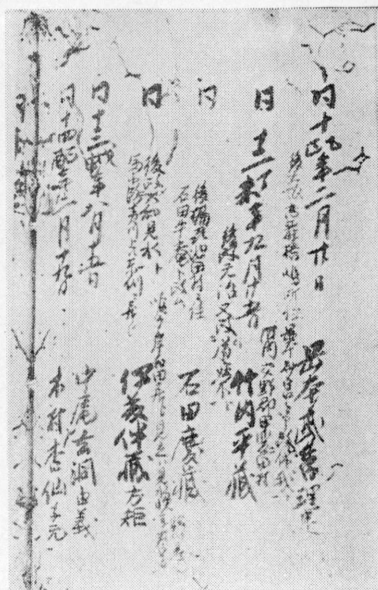
四 伝授と期間

臨床実験を主とし、薬剤特に油薬の調製・煮練法・手術は

見聞及び口伝を従とし経験に重きを置き、傍ら一流一派をなせる蘭法の伝授及び一方には「本草綱目」・「外科正宗」・「外科百効全書」・「傷寒論」、時に「千金方」を説き、期間約五ヶ年以上修得せしめ、随時試問を行い以て熟習せるを確め業を修了せしむ。

五 卒業と免許

修得者には一流の伝授畢りたる許として一定の免許証(第六図)を授与し、且つ見道齋の堂号の『見』または『道』の一字を許与し門弟たる証とし以て一流の医師たる資格を与えた。この免許を受けたるものは藩医として任官または



第5図 伊良子家古記録(道牛手記)

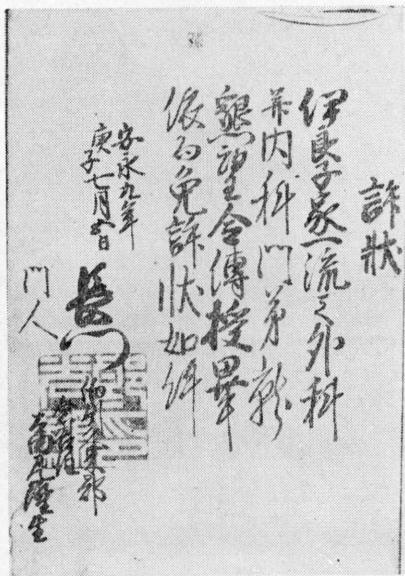
市井にて自己開業をなし、終生師弟としての礼を厚くしその恩顧を弘く天下に奉仕せり。

許状

伊良子家一流之外科 兼内科門弟就
懇望令伝授畢 依而免許状如件

年号 年 月 日

伊良子 名 印
門人 何 某



第6図 免許状(道牛孫光顯筆)

(本要旨は昭和三十年四月三日第十四回日本医学会総会第一分科会において講演せり。)

梶原性全の生涯とその著書 (二)

石 原 明

六 性全をめぐる人々

梶原性全に関係ある人々を「頓医抄」と「万安方」の中から拾い出し、また金沢文庫古文書にあらわれた性全関係の記事をとりまとめると、性全の学統や肉親、後世への影響、師承関係などかなり明かになり、上洛して医を学び鎌倉に来てどんな支援者を得て何処で活躍したかということもほぼ推定できる。以下項目を分けてそのあらましを述べる。

1. 肉身と門流

前にも記した如く、性全は梶原氏の一族で武門の家柄であるのにどうして性全が僧になり医を志したか、また父や俗名は何か、これらのことは目下のところ一切不明である。ただ中年に一時還俗したと見えて子がいたことは「万安方」の奥書から立証される。全体の奥書を綜合するに性

全六一歳ごろにはまだ幼くて医を学ぶに至らなかつたであろうと思われる。その子は源三冬景とよび、のちに道全と号したらしい。冬景は蒲柳の質で喘息か気管支炎か慢性の喘咳に悩んでいたらしい。そのため「万安方」第一六巻の喘咳の部門は特に留意して書いている。別に喘咳の妙薬三百余方を集録して「保氣論」という三巻の書を著わしたこともその奥書から察せられるが、現存しない(奥書本文は後掲)。年まだ幼くしてしかも蒲柳の一子に、漸く老境に至つた性全が多年の学識と経験を整理して「万安方」を編し、これを家学の定本として残す意図の下に努力したことは多くの奥書に記されている。

冬景は性全の示教の結果であろうか、のちに成人して道全と称し海を渡つて江南の地に航し元の医学を学んだらしいことは、「棒心方」序文から察せられる。それによると、

我邦以濟生、世厥業者、唯和丹二家而已矣。近世旁支橫派、争道而出。和家久少聞其伝、丹家一派亦落如晁星矣。爰有梶原淨観公、師承丹家而居其右。夫我邦秦越人乎。有万安頓医両方万安秘而不傳、頓医今行于世矣。厥後曰道全亦英特士也。猶嫌我邦之群書、附舶南遊、其業益大而其観改焉。自全四伝而有人曰長淳。淳浮屠氏也。蹈海婆娑於世、然而才德之所薰、莫以加其臭焉。雖医術集成于茲、而論於之才德、則蓋其緒余苟直焉耳。(家藏古写本による)。

とあつて立派に父の跡をついだ。またこの記事によつて性全の門流が室町中期まで続いたことが知られる。「棒心方」の著者中川子公はこの序にみえる長淳の門人で、序は甌月叟が宝徳三年(一四五二)に作るものである。さらにこの書は天文七年(一五三八)になつて南禅寺の潤甫和尚が増訂し、十二巻として世に伝えた。これで室町末期まで性全の系統が明かになる。

従来、浅田宗伯・藤井尚久両氏ともこの序の『全より四伝して人あり』というのを、性全四世の子孫と解し、長淳は性全の子孫としているがこれは前後の關係から考えて、全というのは道全をさしていること明かであり、また前述した如く、単に四伝とあるだけで血縁關係にあるとも思へ

ず、ここでは長淳は性全から数えて四人目の門流継承者と解すべきが妥当であると信ずる。これらを表示すれば

(第一表) 梶原性全の門流

(元人) 竹翁
 淨観性全 — 道全 — 〇 — 〇 — 古道長淳 — 中川子公 — 潤甫

2. 系統と師承

性全はどんな系統の医学を誰について学んだであろうか。すでに記したように和氣氏の流れを汲み、丹波氏の学をもつていたことは知られているが誰について何時頃学んだのであろうか。「万安方」第八巻上『傷寒後驚悸』の項に注書して『和氣種成入道伝種、自初云腎氣、今世諸人同云也』とあるので、あるいは和氣氏の家学を種成について学んだかとも考えられる。和氣氏のことについては、なお「万安方」第一三・三〇巻にも記されている。種成は「和氣氏系図」によると、

種成、侍医正四位下、兵庫頭、昇殿、典藥權助、母——、出家法名仏種、正応元年九月三十日卒、六十八才、

とあり、後嵯峨上皇の寵を蒙り医博士となり、上皇の崩御によつて入道した当時高名の医家で、和歌にも秀で勅撰集にも佳什がいくつか入つており後人の編ではあるが「種

成朝臣集」一卷が伝わっている。彼の死んだ年は性全二四才に当るから、教えをうけたとすればそれ以前であろう。

丹波氏については「万安方」第二五巻の木香丸の条下に康頼の「医心方」を精検した由が記されており、「頓医抄」第二〇巻『舌諸病』の重舌の条に、

ヨノツネニハ小舌トイフ。此ニハマジナフコトアリ、キハメテ秘事也。別ニ口伝アリ、丹家嫡流ニツタフルモノナリ。

と前おきして刺絡の方法を述べているので、丹波氏の正統の家学を相伝したことは確かであるが、誰についたかは不明である。

以上は平安朝以来の伝統を保持する宮廷医家の隋唐医学の学統であるが、新しい宋医学は新渡の刊本医書を読破して得たばかりに入宋の僧によつて伝えられた学統が明かになつた。このことは従来全く知られなかつたことで、「万安方」第二二巻の長生薬の注記に

此方即宋人秘説、人人雖知此方、不弁由来、日本僧導生上人
在唐九年相伝之、

とあり、また第五二巻の愈家遇仙丹の注に、

私云、此薬參州実相院導生比丘、在唐九年只為習伝於医術也。
仍黒錫丹・養正丹・靈砂丹等諸方、及脉道針灸口決、并此遇仙

丹相伝之。自導生比丘一円禪師尾州長母寺長老以法眷之好伝受之、從

一円禪師以兄弟之胞実相伝之、自実照亦性全受之。此方於宋朝只愈家秘之。不令余家而伝矣、禁防不輕。於本朝即導生禪師

一流伝来、以至予掌握、子孫可秘之々々々。

と血脉が明記されている。宋の愈氏の医学とはどんなものであろうか、いま「宋史」その他を調べても見出せないが、愈家の秘方として導生らの相伝した方名から察するに宋の国定処方集「和剂局方」収載のものに類似しているから、京師の名医であつたと考えてもよからう。「頓医抄」第一〇巻に『京師愈山人降気湯』の名あり、また第一五巻には、

交感丹、此薬ハ則チ愈居易ノ祖 通奉、甲先生ト云フ人ニ
アヒテサツケラル。

とあることからほぼ系統が察せられる。導生という僧の伝は明かでない。その止住した參州実相院というのは、今の幡豆郡西野村にある関山派の禪刹、瑞境山実相寺である。この寺は文永八年（一二七一）に吉良満氏によつて創建され、開山は円爾辨円（聖一国師）である。

一円は無住と号し、鎌倉の人、俗姓梶原、一九才で出家し諸寺を訪ねて八宗兼学を成就し、最後に円爾に調してつ

いに会下に入つて嗣法となり、文永の初年、尾張木賀崎に長母寺を開いて第一祖となつた高僧である。多くの著述のうち「沙石集」一〇巻・「妻鏡」一巻・「雑談集」五巻は説話文学の代表作品として今に至るまで重んじられている。

その実弟が実照で、性全は実照の伝をうけたというから三人とも梶原一族ということになる。この学統を表示すると

(第二表) 導生流の学統

(在宋九年)

甲先生—愈通奉—愈居易—導生—円無住—実照—浄観性全

(入宋)
円爾辨円

これから察するに、無住は円爾について学んだことは確實であり、導生は実相寺にいたというから初祖の円爾の教えをうけたこともほぼ確かであろう。これは禅の教えであるが円爾は入宋して医をも学び、多くの宋版医書を請来したことは現存する「普門院経論章疏語録儒書等目錄」(東福寺蔵、重要文化財)に明記されているところである。故に円爾の医学も禅の系統を通じて導生流に影響していることは否定できず、性全も禅にかなり関心あつたことが奥書からも察せられるから、文献上のみでなく実際の宋医学を継承しておりこれが性全の家学形成の上に大きな役割を演

じたことと思われる。

次に性全が継承した医学に武家の間に伝えられた一系統がある。

「頓医抄」第四五巻は『交接等治』と題され、房中術を記した巻であるが、この中に、

料木ヲ取テ黒ミヲ刀ニテ指切テ、汁ノ出ルヲ茶碗ニ入テ、二三日置テ堅マリタルヲ乳ニテ芥子程ニ丸也。一丸ヲツカハント思フ時、神門ニ押入レテ仕フベシ。男女トモニ歡喜スルコト甚シ。此薬ヲツカヒテ後二三日ハ女人ノ開門摺合フ度ゴトニヨクナル也。此薬ヲツカヒテ強クセムレバタエズシテ死スル也。心得テスベシ。彼ノ料木ノ事深秘ノ口伝也、雖千金万金、易ク人ニ不可伝。此薬ハ河津入道弟子六人ヨリ外ハ知レル人更ニ無也。傾薬丸ト云フ。

と秘伝を公開している。河津入道といえは一般には「東鑑」第一二巻の記載によつて、河津三郎祐泰が裕親法師男とあるところから、例の曾我兄弟の祖父、伊東入道河津二郎祐親をさすことになる。鎌倉幕府譜代の名家たる梶原と河津がどんな関係にあつたかということにはここでは触れないが、特殊な経験医師が河津氏に伝えられていたとみえる。その秘伝は六人の弟子よりほかには伝えなかつた。こ

の一派を性全は梶原氏の故を以て相伝し得たものと思う。

以上明かに認め得た四流の学統によつても判るように、性全は流派の別なくあらゆる医学を研究し、多くの医書を読破し、これに自らの経験を加えて彼一流の医学を作り上げたのである。性全の仏教上の学統もかなり明かになつたが、ここでは医学のみに限つて、仏教の血脉は割愛した。

3. 性全の支援者

「万安方」の奥書から知ることのできる性全の支援者は、明かな者のみでも四人を数えることができる。

第一は宋人道広である。すでに記したように「万安方」の初稿は定本の浄書に際し、約一〇巻ほど道広をして写させている。この道広という人は全く不明であるが、恐らくは禅僧の能書家であつたのではなからうか。そして『宋人』と性全が記していることに對し、古くから嘉暦頃にいた人であれば宋の滅亡後約五〇年も経過しているので元人であるべきだ、と時代考証をしている人もあるが（「万安方」の第六巻の後跋書入）、これは宋の滅亡前に来朝していた人とすれば宋人と称しても差支えなく、あるいは性全に關係ある導生か無住かが帰朝の時伴い歸つた人であるかも知れない。

第二に鎌倉幕府の要人がいる。「万安方」第一六巻の奥書に記されていることから、二人の名が明かである。

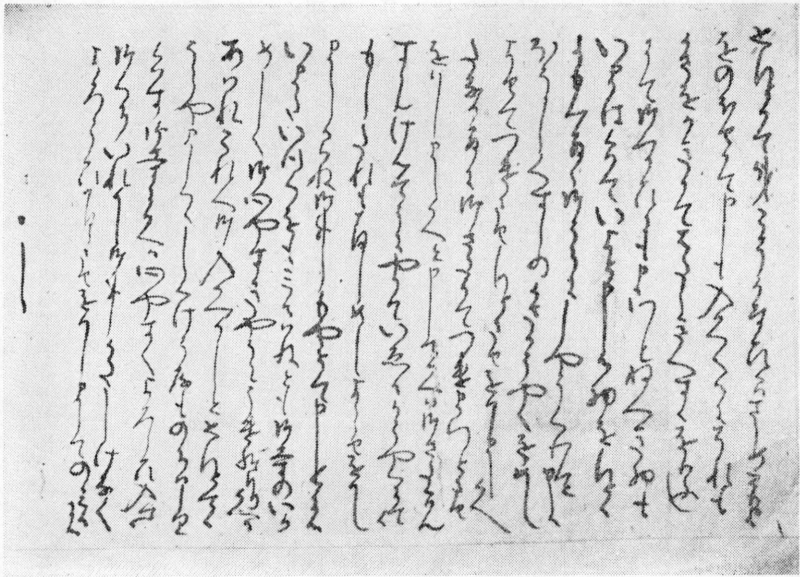
嘉暦元年七月十五日已尅、朱墨両点同時加訖。此一巻治冬景宿病尤可委之。保氣論三巻治喘咳有神藥三百余道、自筆草本在長井洒掃文庫、一本在于二階堂出羽入道行藤書庫歟、可尋看之

性全（花押）六十一才

この二つの武家の文庫については、前金沢文庫長、関靖氏の報告（「鎌倉時代における図書館に就いて」日本古書通信第一一九号、昭和一四年）以来、中世の異色ある図書館としてその方面では重視されている記載である。

長井洒掃は宗秀であつて、大江氏の一族、掃部頭から宮内大輔に進み、和歌の道にも堪能で「新後撰集」・「続千載集」にも入撰している。宗秀が性全の有力な支援者であつたろうことは、金沢文庫古文書第一四七八号に次のように記されていることから想像できる。

（前略）それもかさ（音）をかき候て、はたらき（音）へす候をりふしにて、御つかひにもまいらせぬへき物もいまは候はて、いよと申候物をまいらせ候。かもん殿の御うち（音）に、しやうくわんと申候ほうしくすしの、かさかうやく（音）をめしよせて、つけさせまいらせさせをはしまし候へ。たなか殿



第1図 浄観の記事ある仮名消息（金沢文庫蔵）

候へは、御さた候はんすらん、けんてうにやがていゑ候
（頭書）
 かうやくにて候（後略）

この文書は私が昭和一九年に検出したものであるが、ここに『しやうくわんと申候ほうしくすし』とはまさに『浄観と申候僧医』ではなかるうか。しかも『掃部殿の御内に』いたとあるからには性全は一時長井宗秀の支援をうけていたことになる。「万安方」の奥書では自筆稿本の「保気論」三巻をその文庫に納めたと明記しているので、親密の度も察せられる。

宗秀の子貞秀も性全と特別な間柄にあつたであろうことは、金沢文庫古文書第八一九・八三五号に「頓医抄」貸借の記事があることから察せられる。この文書二通は関靖氏の検出したものである。

蒙仰候頓医抄十五帖借進候、如法重宝候也。又薬種、任御注文可尋進候。抑御契約候し護身法事、未注給候歎入候。自此種々（後闕）

筆者宛名を欠いているがこれは次の文書と一連の関係がある。

御帰之時、定可有御立寄敷之由存候之処、無其儀候条遣恨候
 抑先日御約束候し北斗祭文可給之由候しに、未給候之条、已御

に御さた候て、つけまいらせさせをはしまし候へと申て
（印状）

破戒候哉、無物体候。早々可給候。又、唐船無為帰朝之由、自六波羅注進候、付惣別□□。又、頓医抄御借用候し、可返給候。或人一見望候之由申候。事々期面拜候。恐々謹言

四月十四日

貞秀

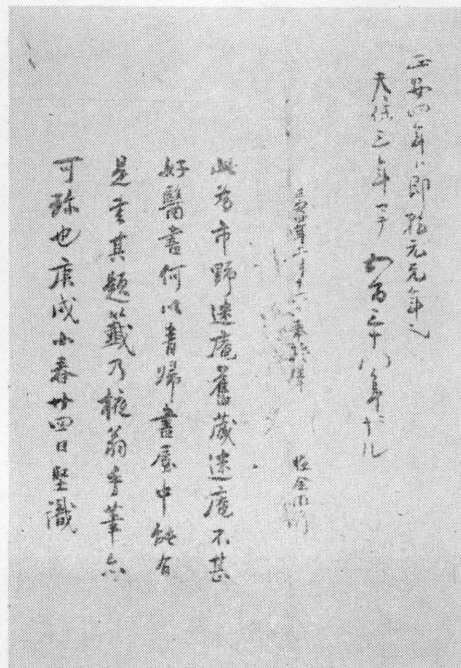
明忍御房

後の文書に唐船帰朝六波羅より注進とあるので、これは乾元二年（一三〇三）のもとと推定される。明忍というのは北条実時の開いた金沢山称名寺第二世長老の明忍房劔阿のことで、劔阿は医学にも明るい学僧である（その著にわが国現存最古の産科專書「産生類聚抄」二巻がある）。

前年七月、北条実時の孫、金沢貞顕は六波羅南方探題として上洛していた。家人の長井貞秀もむろん在洛しており、これを機会に劔阿も所用をかねて京都にいた。医僧の劔阿が性全の新著「頓医抄」のことを伝え聞きこれを何とか見たいものと考えて、貞秀に斡旋を依頼したのであろう。貞秀は父宗秀と性全との間柄から、性全とも親しかつたことと思われる。この二通の文書は「頓医抄」に関する唯一にして最古の記載であり、貞秀は金沢文庫の蔵書の管理にも関係していたことが金沢文庫古文書の

多くの記載から明かであるので、ここに記されている「頓医抄」は性全自筆のもので金沢文庫に納めるべく、性全から得たものではなからうか。

第2図 正安本「頓医抄」の奥書と識語（内閣文庫蔵）



これについて想起されるのは「頓医抄」の一本（内閣文庫現蔵、渋江拙斎旧蔵）の奥に前述の如く正安四年（一三〇二）に性全が授与した旨の識語があることである。「頓医抄」の撰述について記した折に、私は性全が授与した相手を金沢貞顕らしいと推定を下しておいたが、その根拠はこ

の二通の文書によつたものである。長井貞秀が上洛して、当時京都にいて「頓医抄」撰述に余念のなかつた性全を訪れ、これが完成の暁には貞秀が管理に關係してゐる金沢文庫に一本を納めるようにすすめたものではなからうか。そして性全は正安四年にとにかくも脱稿した一部の「頓医抄」を約の如く金沢文庫の主貞顯に献じたと思われる。それは六波羅の貞秀の手許に保管していたのであろう。劔阿がこれを借出して披見してゐるうちに、また他から一見を希望する者があつたので事ついでに貞秀は返却の催促をしたものと思う。なお、この文書の記載によつて、その「頓医抄」は粘葉装で一五帖になつていたらしい。内閣文庫蔵の正安本は勿論後世の転写であるが、もとは一四冊に製本されていた跡が歴然としてゐる。現在欠巻があるので、その分を一帖として全一五帖であつたと考えられるから、ここに記してある一五帖というのと符合してゐる。

なお、現在金沢文庫には「頓医抄」第五〇巻の目録の断簡と思われる鎌倉末期の写本一紙が伝えられてゐる。内容は現存の「頓医抄」と多少相違があるが、以上のいきさつからあるいはこれが正安本の原本の一部ではないかとも考えられる（後述）。

第3圖

「頓医抄」目録断簡、左半面は右の紙背を示す
(金沢文庫蔵)

食雜禁第廿七	房中第廿八	飲禁第廿九	酒禁第三十	藥禁第卅一	醫藥第卅二	解毒第卅三	雜禁第卅四	婦人禁卅五	十二禁第卅六
大辨才一	畜神才二	外起才三	頭髮才六	八甲才八	耳利才十	二才十一	三才十二	四才十三	五才十四
養秋才一	眼目才之	齒才七	沐浴才九	二才十一	三才十二	四才十三	五才十四	六才十五	七才十六

次に第一六卷奥書の二階堂出羽入道行藤とはいかなる人

物であろうか。「鎌倉九代記」によると

弘安五年十一月五日蒙使宣旨左衛門尉卅五、同十一年四月十五日叙留、十三日申畏。正応元年七月廿四日任出羽守。永仁五年三月十五日叙従五位上、同六年二月廿八日為越訴奉行。正安元年四月一日為五番引付頭、同三年八月出家、道暁改道我、同四年八月廿二日卒五十七。

と履歴が記されている。二階堂家はその祖行政以来、幕府の評定衆を家職とした武家における文学の家柄である。行藤の子、貞藤入道蘊は正中以後（一三二四以後）特に幕政の主要な地位にあり、歌人としても著名である。行藤の創立した文庫が子の貞藤に至つても大いに活躍していたであろうことは疑いのないところであつて、性全も他に傍証がないので長井家ほど関係ははつきりしないが、これらの父子と交際のあつたことは想像に難くない。

第三に極楽寺、とくにその開山忍性との関係である。

忍性は大和の人、俗姓伴氏、少にして出家し特に西大寺の思円房寂尊（興正菩薩）について律の秘奥を極め、救療事業に挺身。弘長元年（一二六一）北条長時（義時の孫）の請により鎌倉に下向、靈山極楽寺の開山となり、中世最大の病院を経営、死後菩薩号を追贈された名僧である。そ

の死は嘉元元年（一三〇三）七月で年八七であつた。

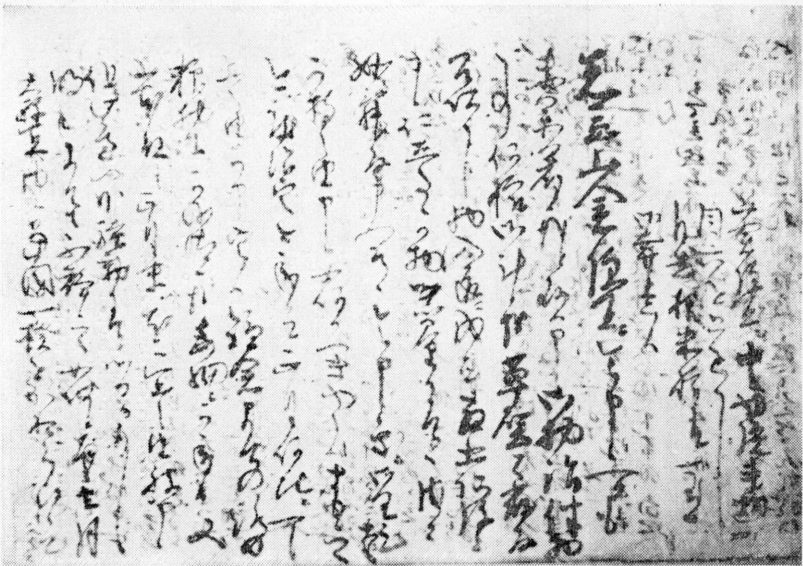
性全との関係は「万安方」では第四三巻に

（嘉暦二年三月）昨日十日大守禪閣、自二所以下向、於極楽寺門前見物、驚目了。

とあるだけであるが、私は金沢文庫古文書中に性全自筆の書状を発見し、その宛名が極楽寺塔頭の勸学院になつてゐることから、性全は一時極楽寺にいたことを知つた。

また、間接に性全の法名が忍性と相似していることから、性全と忍性とは法弟の関係にあり、恐らくは叔尊の法眷であつたと思われることを発見したので、性全が晩年は極楽寺にあつて衆生済度のため大いに活躍していたものと考えらるに至つた。

「万安方」第四三巻の奥書と、金沢文庫古文書第六七〇号の金沢貞願の書状とを考え合せると、この月に北条高時の寵妾が御産の予定であつた。その安産祈願のため高時は行列を整えて嘉暦二年（一三二七）三月七日に鎌倉を出立し、伊豆走湯山と箱根権現に詣り、十日に極楽寺門前を通つて帰着したのである。性全は折よくこの行列を見物しその美々しさに目をみはり、よほど印象的だつたとみえて奥書に記したのであろう。日夜「万安方」に朱墨の加点を行

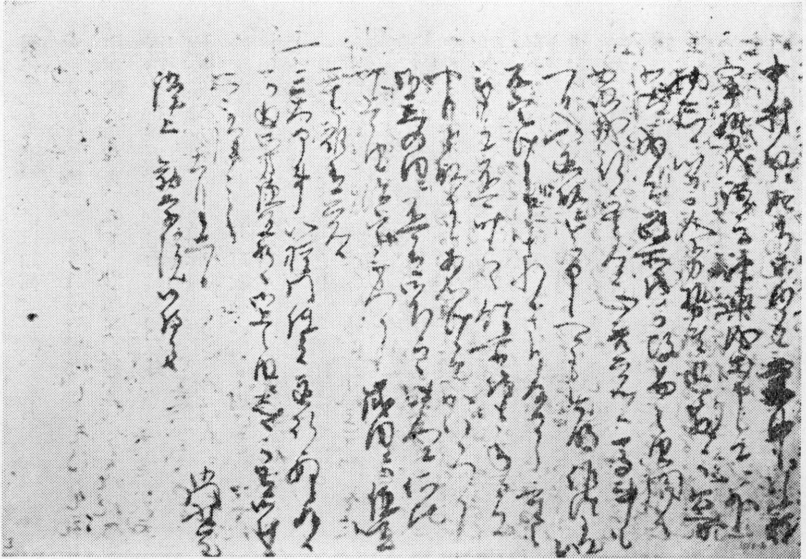


勤学院侍者宛 (金沢文庫蔵)

つていた多忙な彼が、いくら美しかつたとはいえ、前掲、塔供養の大会まで参加しなかつたのにわざわざ鎌倉のはずれの極楽寺の辺まで見物に出かけたとは絶対に考えられない。やはり極楽寺内にいたので折よく門前まで行つて見物したと解すべきではないか。

さらに私の発見した性全自筆の書状は、極楽寺塔頭の勤学院侍者にあててあるばかりでなく、真言の伝法に関する事相目録を便を得て送達しており、また律三大部をも托送していること、六波羅騒動の動静を報じていることなどから、性全は単なる極楽寺の且過ではなかつたことを証するに足る(後述)。

法名の相似とは、忍性は良観房忍性と称し、性全は浄観房性全とよばれていることである。房号では観の字が共通しており法号では性の字が同じである。これは偶然の一致とは思えない。恐らくは同じ師家の下に求法した証であろうか。私は叡尊の法眷と目し、年令と伝法から推して忍性が師兄であつたものと思う。この故にこそ壮年の折は長井宗秀の加護をうけていたのに、のち極楽寺に投じ、忍性を扶掖して今生の瑠璃光浄土の顕現に尽力したのもまた故なしとしない。性全は当時の風習に従い八宗を兼学したので



第4図 梶原性全自筆書状 極楽寺

真言にも律にも、また天台・禅にも明かつたのであろう。

七 性全自筆の書状

金沢文庫古文書第三五一〇号は二葉の楮紙から成る書状で、『沙門性全』と署名あり、私はこれを浄観房性全自筆の書状と断定した。その内容は左のごときものである。

山倉便宜に、中野院事相

目六を上進候し、

自然粮米杯にて可有

御奔走候。

先立、山倉便宜に令申候へとも、

未参著候哉と存候。申候御物詣伴物

事、何様御計候哉、草壁了嚴房

召仕候し物、入道に成候て応悲阿弥と

申候仁、したたか物器量にて候、内々

妙寂房申合候。令申候処に御具足等も

可持之由申候。如何候へきやらん、さも候はは

今度治定と承候て、正月何比に可

上之由可申定候。鎌倉までの路の

粮物等可沙汰候哉、委細に可承候、又

山本殿も正月末は不可宜之由、被申候。

但山辺以外騒動にて候つか、もし

明年までも不静候はは如何と存候。去月

大称宜内々当国一揆をかたらひ候て、

中村殿にたちあい候て、宮中に引籠、

軍勢を語候て神輿を出申候て、以外

物忿候つるが、合力勢共退散候了。公方

沙汰に成候て、政所を可改易之由聞候。

如何成行候はすらんと、心苦覚候。馬事も

一日入道殿に令申候へとも、今明作法にてはと

不定けに申され候、さりながら、重も

承候て、不可叶候はは、余所侍も承候はん

やもと、殿にもあつけ候て、かい候へく候。

御立の内に不可有御下候はは、此人に何比

可上候由、治定承へく候。歳内には便宜

重難有覚候。

一、三大部事、以権門使者、道行候ぬと存候、

可廻御方便宜給候。御上之内念々可有御計候。

恐々謹言。

十一月二日

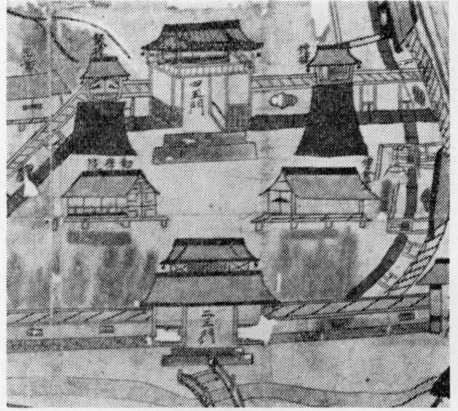
沙門性全

謹上 勸学院御侍者

(本文書は写真との対照上、原本通りの字詰で釈文をつけた)。

この内容より察するに、まず、『山倉の関東下向のついでに「中院流事相目録」をもたせてやつたので、用米などについて心配して欲しい』と前置きし次に『山倉の便のついでに申上げておいたが、まだ到着しないと思うので重ねて知らせる。熊野参詣のお伴はどのように取計つたであろうか。草壁了庵房の召使つていた者が僧になつて応悲阿弥といつてゐる。この者は極めて才能があると内々妙寂房とも話したことである』と推挙し、第二に道中が物騒であるから具足を用意したいがどうか、鎌倉までの食料はもつていつた方がよいか知らせてほしい、と記して日程や道中の騒乱の状を報じ、六波羅政所の政変の噂に及び、第三に道中の馬のことに触れ、第四にこの書状持参の者に上洛の日を決定して伝えて欲しい。年内にはもう連絡がとれなからう。といい、第五に「律三大部」は六波羅の幕府の使者に托して持つて行つて貰つたから受取つたら何分の配慮を上洛までにして欲しい。と結んでゐる。

宛名の勸学院御侍者とは誰であるか判らないが、勸学院はこの文から鎌倉にある寺ということが知られる。しかればこれは一体何処にあつた寺であらうか。いま伝わつてゐる極楽寺の境界図をみると、二王門を入つて四王門に行く



第5図 極楽寺結界図に描かれた勸学院
(部分) (鎌倉・極楽寺蔵)

築地の中に東
側に鐘樓と僧
食堂が並んで
おり、これに
対して西側に
鼓樓と勸学院
が示されてい
る。茅葺切妻
造、四間二面
恐らくは妻入

のさして広からぬ建物ではあるが、極楽寺四十九院中の塔頭の一つである。

もつとも勸学院という名は上方の諸大寺、例えば興福寺・東大寺・園城寺などの子院にもあるが、鎌倉ならば極楽寺以外には見当たらない。それで私は他の性全の史料を傍証として極楽寺勸学院と断定したわけである。

この書状から察するに嘉元三年(一三〇五)四月二三日、北条時村が殺され、翌月二日には殺害の徒党十一人を誅し、また四日には六波羅北方勤務の北条宗方を誅し、これらのことによりこの年は騒乱があちこちにあつた。この

状況を記したものと思われるから、多分嘉元三年の書状と察せられる。金沢貞顕はこの時、六波羅南方に在勤であつた。

性全は「頓医抄」著作後鎌倉に下り、忍性との縁によつて極楽寺に関係し、時折、所用のたびに寺務をも托されて上洛したものと思われる。書状中の『中野院事相目六』とは、真言宗の一派、中院流の事相伝授目録をさしていることは明かで、真言についてもまた律についても見識があつたと思われる。なおこの書状に関連して金沢文庫古文書中(千葉・武本為訓氏の所蔵であつたが焼失した)に左のものが見出される。

(前欠) 申候とて性全御房、彼人はかなふまじきよし承候間、重不及申候次第候。性全御房坐香取候之間、委細不申承候。又これほどに不落居物を口入申候ける事、返々所存之外存候。将又、自熊野御下向申候て愚身無子細候はは、面拜之時子細可申承候。毎事期其時候。 恐々謹言。

二月二日

沙門妙寂(花押)

謹上 勸学院御侍者

前文が存しないのでよく判らないが、性全の名の出てくる唯一の文書で、しかも前掲の性全の書状中にある妙寂房

が極楽寺勧学院にあてた書状で、日附から察するに性全の書状の翌年二月に書いたものである。これによると性全の書状にある勧学院侍者の上洛は熊野参詣が目的であつたことが判り、性全が推挙した応悲阿弥なる下人は期待に反して不都合が多かつたことを、妙寂房が性全に問詰しようとしたらしいが、性全は坐つて香を焚き想いに耽つていたので何もいわず、その鬱憤を勧学院に洩らし、細かいことは自分が出向いて話をする、ということである。性全の折角の推挙が水泡に歸した模様と察せられる。

なお、金沢文庫には道全と署名ある書状の断簡を伝えている(第二九〇七号文書)。宛名を欠いており、本文も不明の箇所が多く、これだけでは果して性全の子の道全自筆の書状であるかどうか明かではないが、日附が後二月十四日とあるので、閏二月のある年を性全の生存期間中に求めると、元弘三年(一一三三)即ち北朝の正慶二年に当るのであるいはこれも道全(冬景)かと察せられる。全文は左のとおりである。

〓 令 〓

〓 拜可 〓

仰之旨可有御披露候

第6図 道全書状(金沢文庫蔵)



恐惶謹言

後二月十四日

道全状(花押)

内容は披露状の末尾と覚しく、何か道全が光栄と感じたことを披露して貰いたいとの意であつて、幸いにも日附に前記のごとく『後』とあることからはずきりした年代がわかる。

この書状の筆蹟と筆勢をみるに、老年の人の手ではないようであるから「万安方」校訂の頃、性全が深く心配して

いた蒲柳の質の少年源三冬景は、まもなく仏門に入つて得度し道全と称したのではなからうか。これは全くの想定であるが、一応の疑いを存しておく。

八 「頓医抄」と「万安方」の伝本

前述のごとく、「頓医抄」と「万安方」とは大部の巨冊であり、且つ刊行されたこともないので現在世上に存する伝本はさして多くない。

そしてその伝本の系統はかなり明かで、あまり異本と目すべきものがないことは、原本の面影を知るため有難いことであるが、性全自筆の真本はすでになく、「万安方」に至つては秘本とされていたため、延享二年（一七四五）以前の写本を見ることができないのは遺憾とするところである。

次に「頓医抄」・「万安方」の伝本の系統を略記し、終りに単行で伝来したと思われる「五藏六府形候」の系統について知り得た限りを発表する。この伝本の系統はなお後日の補訂を期すものである。

1. 「頓医抄」伝本の系統

性全が「頓医抄」をはじめてまとめた、いわゆる初稿本

の一写本断簡が金沢文庫に現存する。これは僅かな断簡であるが第五〇巻の目録で鎌倉時代末期の特長ある筆蹟で、あるいは性全自筆かとも想像されるけれども、いまにわかには断定し難い。「頓医抄」の現存最古の本でこれを便宜上、初稿本系統と考へ、『金沢本』と名ずける。

初稿本をいづらか整理し訂正を施したと思われる再訂本の系統の写本が内閣文庫に現存する。これは現在二五冊になつており、室町末期の写と江戸初期の写とで取合されており、市野迷庵が入手したもの。迷庵は医書をあまり好まなかつたので狩谷核斉に譲つた。核斉はこの時改装して自ら題箋を加えた。私がこの本を昨冬内閣文庫で閲覧した時、表紙裏に巻数を記してない核斉自筆の題箋が数枚紙包みにされて挿入してあるのを発見し、未貼の分に補ひ、余は司書の手によつて巻末見返しにこの巔末を記して貼りこまれた。前述の正安四年（一三〇二）奥書ある本である。この本は核斉歿後、渋江抽斎の有となり、多紀元堅が借り受けた時左の識語が巻末に書き加えられた。嘉永三年（一八五〇）のことである。（第2図参照）

此為市野迷庵旧蔵、迷庵不甚

好医書、何以青婦書屋中能有

是書、其題籤乃椽翁手筆、亦

可珍也、庚戌小春廿四日 堅識

これよりさき元堅の祖父、広寿院元徳もこの本を見た
みえて、現在東京国立博物館蔵の多紀家旧蔵「頓医抄」
(享祿本系統、後述)は巻四四を全くこの本によつて補つ
ている。

私は便宜上、右の再訂本の系統と覺しきものを『渋江本』
又は『正安本』と称したいと思ふ。

次に流布本の祖となつた定本は、性全自筆のものがい
なる経路を辿つたか不明であるが、室町末期に尼子伊予守
の手に入つた。伊予守はこれを主君の雲州大守(毛利元就
?)に献じた。これを『雲州本』と名づけける。『雲州本』は
現存不明であるが、これに基いて忠実な写本が出来た。

流布本の「仮名万安方」として享祿二年(一五二九)の
奥書あるものによると、雲州本を曹源院全公が一筆書写し
たものがあつたことが知られる。これは雲州大守毛利氏が
京都から五山衆を招き寄せて写させたものである。その本
がいかなる経路をたどつてか宗鎮庵玉岡の手に入つた。そ
の一族(恐らくは子)の宗慶という者がこれに竹田月海所
伝の秘方と安芸大膳介の家方を附加し、これを宗寿(恐ら

くは宗慶の弟)に伝え、宗寿はこれを校合し享祿二年六月
に跋を加えた。この本は後に藤原祐盛の手で再写され、さ
らに校訂が加えられ、竜室なる者の所蔵を経て幕府の昌平
坂学問所に入り、明治になつて浅草文庫を経て現に内閣文
庫に蔵せられている。これを『享祿本』または『仮名万安
方』と名づけける。『仮名万安方』と称するのは享祿の跋文
に、

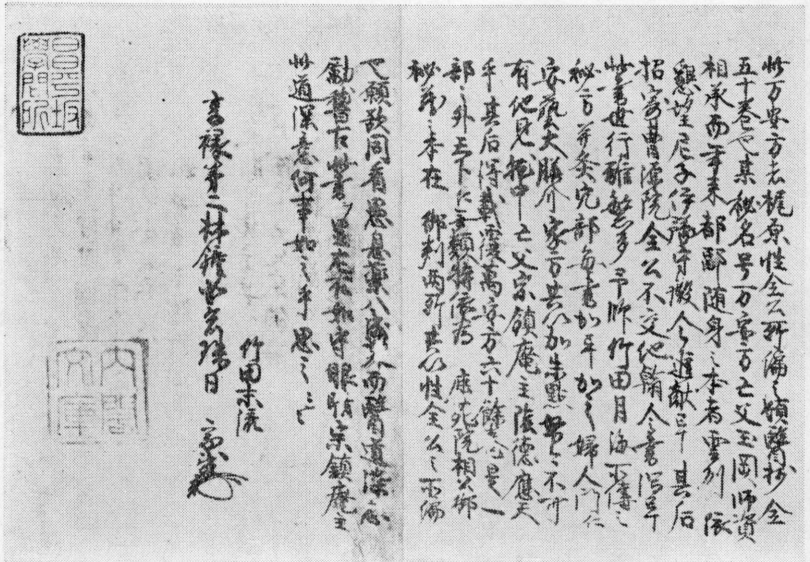
此万安方者、梶原性全公所編之頓医抄全五十卷也。某秘名号
万安方。

とあるによつたもので、真本の「万安方」と區別する必
要からかく名付けたのである。この系統の本が世上に最も
多いとして宗寿の署名の右に「竹田末流」と書いてあるこ
とから、本文に月海秘方を附加したことに関連して竹田月
海の末裔と解したり、第三二巻の尾に、

謹按、宗寿者我先大夫光祿府君、晩歳一号、而花押則異于家
譜所載恐是由伝写訛者、是書跋云、附安芸大膳亮家方、蓋此等
之謂也。寛政六年甲寅暮二十二日、裔孫正六位女医待詔大和介
源一謹識(花押)

と安芸源一の考証があつて、安芸宗寿に擬したりする向
もあるが、何れも臆測で、実は宗寿は五山衆の医僧であ

ることを明かにすることができた。



第7図 享祿本「頓医抄」跋文（内閣文庫蔵）

享祿本は昌平坂學問所にあつた頃、宝曆五年（一七五五）に度会常芬によつて伝写され、また寛政年間多紀元徳によつて校訂転写されて広く流布するに至つた。

度会本系統のものには、杏雨書屋蔵及び家蔵の一本などがあり、原南陽が度会本を写した時にはさらに荻野台州所蔵本と曲直瀬東井旧蔵本（何れも享祿本系統）を参照して文字の異同を正している。これはのちに水戸彰考館に献納され現存する。またさらに彰考館本は新写されて笠間文庫にも蔵せられ、今は上野図書館に存する。

多紀本は享祿本を主とし、第四四巻は再訂本系統の正本を以て写し、現在は東京国立博物館に存する。近年、この本は井上書店の手で二部新写され、一は杏雨書屋に、一は藤浪氏乾々齋文庫に納められたが、現在何れも武田薬工所蔵となつている。

多紀本は恐らくその門人によつてかなく多く伝写されたであろう。一例を挙げれば、奈須恒徳の写したものは、富士川游先生の架蔵を経て現に赤松金芳氏が所蔵している。以上記したところは管見に入つた系統の確認し得る伝本であるが、このほかに室町時代の書写に係る二本（福井崇蘭館旧蔵本・前田氏尊經閣文庫本）があるが、何れも享祿

本系統とみなし得る。

2. 「万安方」伝本の系統

「万安方」は「頓医抄」と異つて、秘本とされていたか、性全が定本とした本の一系統あるのみである。

前述のごとく、「万安方」の初稿は正和四年（一三一五）に一応脱稿し、その後清書して朱墨の点を加え五〇巻本として嘉暦二年（一三二七）に完成した。その後、単行の別本が附加されて子の道全に定本が伝えられた時には六二巻となつていた。別本の附加はあるいは子の道全によつて成されたかも知れない。道全の手からどういふ経路を辿つたか不明であるが、足利義満がある時この本を一見して首尾の遊紙に自署の花押を加えた。義満は応安元年（一三六八）に一一才で將軍となり、応永一五年（一四〇八）に五一才で卒しているから、「万安方」を一見したのは応永一五年以前ということになる。その後の事情もまた明かでないが永正頃（二五二〇頃）に宗鎮庵玉岡の入手するところとなり、玉岡は「頓医抄」雲州本と共に天下唯一の「万安方」をも所蔵することとなつた。その由は享祿本「頓医抄」の宗寿の跋によつて知られる。即ち、

就中亡父宗鎮庵主、陰徳応天平、其後得覆載万安方六十余巻。

是一部之外、天下ニ無類持、依為鹿苑院相公御秘蔵之本、在御判兩所。共以性全公之所編也。

とあつて、本書を義満秘蔵本と解しているが、花押があつたからとて所蔵を意味するとは限らず、一覽に供えた折に鑑証として花押や捺印する例は中世には屢々みられるから、私は義満生前に一見したことがあると最少限に解しておく。

玉岡の死後、子の宗寿に定本「万安方」は伝えられた。性全自筆（但し約半数は宋人道広の清書）の定本として、また家学の秘本として恐らくは他に写しもなくただ一本であつたろうと思われる。宗寿の書入れが第六巻の尾に天文四年（一五三五）の記事として記されているのを最後に、宗寿の後、建仁寺大統庵で岡本宗什が見出すまでの経路も全く判らない。しかし私はひそかに宗寿は建仁寺会下の信士で、永祿頃（二五六〇頃）に天下の秘本たる故を以て「万安方」を大統庵に寄進したものではないかと想像している。

現存する最古にして伝来の正しい「万安方」は延享二年（一七四五）に前述の定本を望月三英のすすめにより所蔵者の岡本寿品（四代目玄治）が複写して、幕府に進献した本である。性全の定本をいかにして岡本氏が入れたかは

前掲、人見卜幽の「東見記」に記されてあるとおり慶長頃（一六〇〇頃）に岡本宗什（初代玄治、啓迪院法印）が白銀十兩を以て建仁寺大統庵から買取つたものである。岡本宗什はこの書を得て深く喜び、その後伏見城にて家康に目通りし、元和九年（一六二二）秀忠によつて医官の列に加えられ隔年東下して医名一世に鳴つたという。その子孫玄琳・寿仙・寿品ともに代々玄治を襲名したが、四代目の寿品の代にこの書の散佚を恐れ、複本一部を作つて紅葉山文庫に納めたいきさは現に内閣文庫に存する献上本の首に記されている『献万安方序』に詳かである。その後、原本はいかになつたか明かでない。恐らくは現存しないと思われるが、ともかく献上本によつて幸いにもわれわれは性全の定本の全貌を知ることができるのは寿品の功によるものである。献上本複写の際、このことを勧めた望月三英も一本を写し取つたらしいが、これは現存不明である。

現在、知られている「万安方」はすべてこの紅葉山献上本の写しで、多紀元徳が借覽して写しとつた本は寛政五年（一七九三）に元簡が跋を附して家藏としたものが宮内庁書陵部に現存する。多紀氏はまた家藏の他に一部を写して医学館の蔵書となし（この方が写しが粗雑である）、現に東

京国立博物館にあり、近年これに基いて新写した二本は杏

之七彼存此而其引用亦獨在此
書則可謂海內無双古方書也今
也藏之

秘府則使彼性全之業再垂不朽
臣亦與此頭祖先十襲之切豈不
幸哉臣歲已八十耄矣無能為而
不任犬馬之先伏惟
國家無窮之

恩無報萬一喜遇此夢聊表愚衷
以叙其由云爾

延享二年乙丑冬十二月

啓迪院法眼 岡本 玄治 謹上

第 8 図 岡本玄治（四代目）の献辞（内閣文庫蔵）

雨書屋と藤浪氏乾々齋文庫に納められたが、今は二部とも武田薬工の所蔵となつている。

多紀氏門下の人たちも幾人かが写本を作つたらしいが、大部であるため容易なことではなかつたらしい。一例をあげると、小島宝素は多紀氏家蔵本によつて自ら手写し、その識語によつても天保三年（一八三二）から約五年を費やしたことが知られる。宝素手写の本はのち改装され諸処を転々としたが、今は金沢文庫に保管されている。

医学館本によつた転写本の一つに、原南陽写本がある。これは前章に記した「頓医抄」と同様に彰考館に一部、これから出た笠間文庫本が上野図書館に現存する。

以上、「万安方」の伝本について管見に入つたもののみを列記したが、「頓医抄」と異つて系統はただ一つ、しかも近写のものと雖も現存数少く、恐らく全国を精査しても十部前後であり、何れも多紀本か医学館本、即ち岡本寿品献上複写本に源を発すると断言することができる。

3. 内景図単行と抽印刊本について

「頓医抄」第四四巻の内景図のみの単行での伝本は現在二種の別あることが判明した。前にも記したように、もとこの解剖図説の分は解説と附図、即ち「頓医抄」の第

四三・四四巻の二巻にあたる部分より成るものであろうが、今単行で伝わっているもの多くは第四四巻の図のみのものが多い。しかし、一方には図を略して本文のみを写した伝本もある。これらのうち伝来の判明した一本には巻末に左の識語がある。

此一冊者越州一乗谷從一伯齋相伝之本也

この本には表紙に後人の附した「内景五藏図及十二経脉図」の題箋があり、写しは寛政四年（一七九二）で新しいが、何度か転写したものごとく、もとは室町末期のものと思われる（乾々齋文庫旧蔵）。内容は享祿本よりすぐれ、誤写は少い。他の伝本は享祿本系統で「家蔵方」と題する宝曆写本（巻尾欠、研医会図書館蔵）、無題名の江戸中期写本（家蔵、本文なし）などが管見に入つている。

さて、前掲の識語によつてその伝来を考うるに、越州一乗谷とは越前国足羽郡の地名で小白山ともいい、白山権現の初めて出現した靈地とされ、泰澄によつて創められた一乗寺の址である。その後、南北朝のころに朝倉高濂八世の孫、日下部広景が斯波氏の目代となつてこの地を領し、その六世の孫敏景ここに一乗城を築いた要害の地である。それより織田信長のため圧迫され天正元年（一五七三）義景に

至つて朝倉氏は滅亡したが、一時この地は京都の公卿の疎開あり、清原氏來つて講説を行い朝倉氏の保護を得て北越における文教の中心地となつたことがある。「朝倉始末記」によれば、

弘治五年八月、公卿たち京より一乗へぞ下向し給ひける。屋形義景、惻篤して様々饗応給ひけるが、秋來旅泊の愁襟をも慰め参せんがため、水石の勝地を求め遂に一乗の阿波賀河原にて曲水の宴をぞ催されける。

と見え、また天文五年（一五三六）にこの地で朝倉孝景の招きによつて医学を講じた入明の名医谷野一柏によつて「勿聽子俗解八十一難經」が開版されている。その刊記は、

越前州一乗谷之良位一里許有

山曰高尾其麓有寺人号曰高

尾寺寺有堂安以医王善逝尊像

太守曰下氏宗淳公傳一柏老人

校正熊宗立所解八十一難經之

文字句詭而募工鏤梓以置於

本堂蓋医国救民之意歟

玆天文五年丙申九月九日 积専芸

とあつて、その間の消息分明である。この本は明の熊宗

立が成化八年（一四七二）に刊行したものの覆刻であつて、わが国の医書出版史上重要な資料である（拙稿「日本中世古版医書年表」本誌第五卷第三号参照）。

さて、前掲の識語に『一伯齊』とあるのは、まさに「俗解難經」の校刊者たる谷野一柏をさすもので、伯は柏字に作るべきである。谷野一柏の経歴は詳しく判らないが、当時の名医で朝倉孝景（日下部宗淳）が一乗谷に招いて医を講じさせたらしく、「頓医抄」の内景図も講義の材料に用いられたものであろう。但し谷野一柏がいかにして性全の著書を手でできたかは全く不明である。

ともかくも一乗谷本内景図を知ることができて、性全の著書が意外なところで講じられたらしい事実には私たちは多大の興味を覚える。

次に「頓医抄」の一部分を抽印した刊本について述べらる。

この本は中川壺山の「本朝医家古籍考」に、一種刊行ノ本アリ。是ハ五十卷ノ中ニテ卷二十七ヨリ三十七ニ至ルマデ、九七卷ヲ刊行ス。是婦人門也。コレハ女科ノ人其道ノ為ニセシモノト見ヘタリ。

とあつて早くより知られていた。私も多年その原物を求

めていたが、幸いにも京都大学の富士川文庫中に存するものを見る事ができた。「婦人頓医鈔」と題され、七巻七冊、縦六寸四分横四寸五分の青表紙の本で、一頁九行、校正者の名も序跋もなく、刊記は、

天和三癸亥年林鐘吉日

洛陽寺町五条

中野宗左衛門 開板

とある。本文は流布写本とかなり出入あり、十巻を七巻に刪略したため原本と比べると省略も少くない。しかし、性全の著書のうち印刷に附せられた唯一の部分である。

以上、三項にわたつて管見に入つた「頓医抄」と「万安方」の伝本全部について、その伝来と系統を詳説したが、性全自筆の原本は存しないにしても、比較的忠実な写本の存在によつて偉大な業績を偲ぶことができ、またその伝本の系統によつて江戸末期に及ぶ永い間重要な地位を占めていたことが認められる。われわれはこれらの著書によつて鎌倉時代の医学の全貌を知ることが可能である。そしてまた梶原性全のわが医学史上に占める地位を再認識することを得たのは大きな収穫といわざるを得ない。

終りに当り、貴重なる資料の閲覽と写真撮影を許された各図書館当局の御厚情を謝するとともに、中世文化史の多くの隠れた史実について親しく教示をいただいた前金沢文庫長文学博士関靖先生に心から御礼を申し上げる。

なお、とくに内閣文庫本の調査については破格の好機を与えられ、十分な調査を行うことのできたのは、前文庫長岩倉規夫氏と司書の福井保氏の力によることが多い。末尾ながら衷心より感謝する。

附記「頓医抄」の五藏六府図については、今まで詳しく調べられたことがなかつた。私も「欧希範五藏図」と「華陀内照図」の引用という従来の通説のほかに、新しく李子桂の「難経注義図」の影響あることを追加したに過ぎなかつたが、渡辺幸三氏の教示によつて、「華陀内照図」は楊介の「存真環中図」を襲用したもので、桃源和尚の「史記標注」に引かれた文章から「頓医抄」の記文は、その忠実な訓訳に性全の私見が加えられたものであることを知つた。詳しくは同氏の論文について見られたい。附記して謝意を表する。(三二、七、一稿)

理事長重任……去る七月、本会理事長及び役員任期満了となつたので七月十九日夜、東京において在京役員会を開き協議の結果なお一期重任と決し、内山理事長は理事以下現役員全員も重任して協力されるならば、との条件で受諾された。従つて昭和三十三年七月まで現役員の方々も重任されることとなつた。改めて依頼状を出さないが、誌上をかりて経過を報告し、御諒承を願う次第である。なお、この件に関し石原幹事は経過報告と協議を兼ねて八月中旬西下、関西支部役員の方々にも諒解を求め快諾を得た。

評議員推挙……来年春の第五九回本会総会は別報のごとく、阪大で開かれるが、これに伴い中野会長から左記の方々の御協力を得ているので、新たに評議員に推挙方、関西支部より申出があつたので、内山理事長と緊急協議の上、新しく評議員としてお迎えすることに決した。新評議員は

安田竜夫 大阪大学医学部教授(病理学)

宗田 一 吉富製薬バイエル薬品部勤務 薬学士

杉 靖三郎理事外遊……杉理事は世界医師会誌編集会議を始め、多くの国際会議に出席のため、約半年欧米各国を廻られることになつた。本会としては代表として各国医史学会との連携をとるべく委嘱、本年の国際医史学会には日程の都合で間に合わないが、終了後でもマドリッドを訪問、日本医史学会との連絡をされることを約され、八月下旬出発の予定。

内閣文庫漢籍分類目録……内閣文庫所蔵の医書は余り世人の注意をひかないが、幕府医学館の旧蔵書をはじめ楓山文庫、多紀氏旧蔵書を有する点、一大宝庫といわねばならぬ。今回、新たに漢籍のみの完全な目録が発行され、記載の周到、分類の新鮮に加えて詳細な索引の得られたことは学界の慶事である。医書本草書の部は本会幹事石原明博士が担当、約千五百部に及ぶ漢籍医書は必ずや重大な影響を与えるであろう。同文庫刊。非売品
明治前日本医学史第三巻……すでに既刊二冊によつて定評ある日本学士院編の本書はその続刊が久しく熱望されていた処、このたび漸く第三巻の刊行をみた。内容は内科史・創傷療法史(以上藤井尙久著)、南蠻医学史(太田正雄遺稿、藤井尙久訂)、治療学史(西川義方著)の四部より成り、何れも分科史における現代最高の権威ある論考で、改めて紹介するまでもない。多数の図版またよい史料である。本巻のみ千円。丸善取次。

朝鮮医書誌……さきに刊行された本会理事、三木栄博士の「朝鮮医学史・疾病史」の姉妹編で、朝鮮医書のすべてに関する詳細な書誌学的労作である。本書の出現によつて東洋医学史は新しい分野の開発をみるべく、多年実物について内外各地を調査された著者ならは全く不可能な大事業である。B5判四七七頁図版多数。前者同様私家版百二十部限定。頒価千二百円の処、本会々員に限り送料共千円である。前者も刊行後すく荒切れたので希望者は至急堺市熊野町西一丁大道筋、三木栄氏宛申込み

精神科領域に

薬剤冬眠に

悪心・嘔吐に



コントミンは其後各科領域に於て臨床実験が重ねられ、非常に興味ある結果が数多く報告されています。

又、コントミンの健保による使用が全適応症に認められ、御使用が非常に便利になりました。

—健保点数—

錠剤(12.5mg)1錠 2.2点
// (25mg) // 3.7点
注射液0.5%5cc1管
筋注 18点

内科小児科	名種原因による悪心・嘔吐、疼痛、吃逆、頑固な不眠症、夜尿症、痙攣、悪性症候群
精神科	躁病、鬱病、精神分裂症、症候性精神病、反応性精神病、不安・恐迫神経症、ヒステリー
外科	前麻酔、強化麻酔、薬物冬眠、ショックの予防及び治療、手術後の疼痛・嘔吐及び高熱症
産婦人科	妊娠悪阻、無痛分娩、子癇
眼科	緑内障、白内障、斜視手術
皮膚科	带状疱疹、慢性蕁麻疹、湿疹その他

〔上記名科領域に於ける臨床報告文献集送呈〕

クロルプロマジン製剤

コントミン

糖衣錠 (12.5mg) 100錠 (¥1,000), 1000錠 (¥8,900), (25mg) 50錠 (¥8,900) (5mg) 30錠 (¥10,000), 注0.5%2cc10A (¥630)5cc 5A(¥750) 5cc 50A (¥6,500) 2.5% 2cc 10A (¥1750)

製造 吉富製薬株式会社 大阪市東区道修町2ノ25
販売 武田薬品工業株式会社 大阪市東区道修町2ノ27 (Co-6)

番書取調所旧蔵和蘭医書目録

大 鳥 蘭 三 郎

さきごろ、上野図書館の書庫で発見された旧徳川幕府番書取調所所蔵本を中心とする数千冊に及ぶ蘭書のうちで、医学関係のもの目録をかりに作った。かりに、というのは順序も全くたえず、ただ列へあげただけであるからである。これらのうちには同じもので何冊もあるものが少くない。各書の末尾の番号は整理番号である。

A. G. van Onsenoort: De operative heekunde (外科手術). Amsterdam.

第1巻 1822, 第2巻 1824, 第3巻 欠 1035・1036

Eduard Martin: Leerboek der verloskunde voor vroedvrouwen (助産婦のための産科学教本).

H. W. Gramer 蘭訳, Utrecht 1855. 1095・1127・1130・1173・1267~70

G. E. Bock: Handboek der Ontleedkunde van den mensch (人体解剖学教科書). P. H. Pool 蘭訳, Amsterdam.

第1巻, 第2巻 1840, 第3巻 1841 (各巻に安政戊午の印あり) 1032・1033・1436~8・2796・2925・2929

H. F. Naegele: Leerboek der verloskunde (産科学教科書). H. J. Broers 蘭訳, Utrecht.

第1巻 1843, 第2巻 1856 1310~3

J. A. Hes: Encyclopaedisch handboek der tandheekunde (歯科学百科全書), Utrecht, Amsterdam. 1856

(明治九年文部省交付の印あり) 1261~3

(31)

- A. Numan: Handboek der Geneesen Verloskunde van het vee (家畜の産科学教本), Groningen.
 1844 第4版 (安政戊午の印あり) 1123
 1856 第5版 1715
- Jos. Hyrtl: Leerboek van de ontleedkunde van den mensch (人体解剖学教科書), Peelen 蘭訳,
 Donders 序文, Tiel. 1850 1652
- C. G. Burger: Handboek van de heilkundige verbandleer (包帯学要綱). H. H. Hageman 蘭訳. Utrecht,
 Amsterdam. 1850 1650 • 1651 • 1993
- J. F. Osiander: Volksgeneeskundige of eenvoudige middelen en raadgevingen tegen de kwalen en krankheden
 der menschen (民間医学). J. A. van Oort 増補. Leeuwarden. 1854. 第5版. 1121 • 1418 • 1578 • 2192
- H. J. Broers en L. C. van Goudouvers: Nederlandsch tijdschrift voor Verloskunde, ziekten der vrouwen
 en der kinderen (和蘭産科学雑誌). Utrecht.
 第1~2巻, 1849 1321~3. 第3巻, 1850 1324~6.
 第4巻, 1851 1330~3. 第5巻, 1852 1334~7.
 第6巻, 1854 1338~42. 第7巻, 1855 1343~6.
 第8巻, 1856 1348~51.
- W. Vrolik: Handboek der ziektekundige ontleedkunde (病理解剖学教科書). Amsterdam. (各巻安政戊午・明治九
 年文部省交付の印あり) 第1巻, 1840 2912, 第2巻, 1842 2913
- J. P. Maygier: Volledige verzameling van afbeeldingen, uit den geheelen omvang der theoretische en practis-
 che Verloskunde (産科学領域における図解全集). S. J. Galama 蘭訳, 第2巻図版. Amsterdam,

1850	2903
A. E. Simon Thomas: Verslag der verloskundige kliniek en polikliniek aan de Leidische Hoogeschool (ライ デン大学産科学臨床講義録). Leiden, 1855~6	1327~9 • 2772
D. W. H. Busch: Leerboek der verloskunde (産科学教科書). H. H. Hageman 蘭訳. Amsterdam, 1846	1999
D. W. H. Busch: Theoretische en praktische Verloskunde, door afbeeldingen opgehelderd (図解産科学). Hageman 蘭訳. Amsterdam, Dortrecht. 1841, 2 Bde.	1995~7
———: Handleiding voor vroedvrouwen (産婆手引). Amsterdam, 1855	2427 • 2648
J. Schlesinger: Over den invloed der inademing van den Zwavel Aether op Menschen en Dieren (硫酸エーテ ル吸入の人及び動物に対する影響について). Sarluis 蘭訳 's Gravenhage, 1847	2420~2 • 2425 • 3231
T. G. A. Roose: Handboek der natuurkunde van den mensch (人体生理学教科書). Ypma 蘭訳. Amsterdam, 1845	1362 • 2308
J. P. Hoebeke: Geneeskundige Dagboekje (医学手帳). Tiel, 1850	3483~4
———: Guttapercha (グツタペルカ). Amsterdam	2609
Hildebrand: Gezondheidsleer van den mond (口腔衛生学). Utrecht, 1817	3243
M. Troschel: Handleiding tot de leer der verbanden (包帯学手引). Scheffer 蘭訳. Utrecht, Amsterdam, 1847	2232
F. W. Scanzoni: Compendium der verloskunde (産科学大要). Roll 蘭訳. Amsterdam, 1856	1680 • 1702 • 2264 • 2289

- Sebastian: Algemeene natuurkunde van den mensch (一般人体生理学). Groningen, 1840.
 (佐倉蔵書印あり) 3349
- G. F. van Dommelen: Geschiedenis der militaire geneeskundige dienst in Nederland (オランダ陸軍軍医史).
 Nijmegen, 1857 1273 • 1465~7 • 3195
- : Nederlandsch Lancet (オランダ ランセット). 第4巻. Gravenhage, 1854—1855 2915
- E. Martin: Vragenboek ten gebruik bij het Leerboek der verloskunde voor vroedvrouwen (産婆用産科学教科
 書問答書). Cramer 蘭訳. Utrecht, 1857. 1357 • 2031 • 2780 • 2798
- : De pharmacopea Nederlandica en pharmacopea Belgica (オランダ薬局方及びベルギー薬局方).
 Nijmegen, 1853 1358 • 1747 • 1990 • 2781 • 2797
- A. Moll: Leerboek der geregtelijke geneeskunde (法医学教科書). Arnhem, Bd. I • II 1825,
 Bd. III 1826 2248~50
- C. J. von Siebold: Handboek der geregtelijke geneeskunde (法医学小典). Rombouts 蘭訳.
 Tiel, 1847 1385 • 1511
- W. Bosch: De dysenteria tropica(熱帯性赤痢). 's Gravenhage, 1844 1506
- J. A. Oudemans: Aanteekeningen of het systematischen pharmacogno'sch-botanische gedeelte der pharmacopea
 Neerlandica (オランダ薬局方註解). Rotterdam, 1854—1856 1469 • 2110 • 2112
- Gerlach: Handboek van de algemeene en bijzondere weefselleer van het menschelijk ligchaam (人体組織学総
 論及び各論). Hageman 蘭訳. Utrecht, Amsterdam, 1850 1532 • 1998
- Fr. Osterlen: Handboek der algemeene en bijzondere gezondheidslehre (衛生学総論及び各論). Doijer,

- Allebe 蘭訳. Amsterdam, 1856 2140~2
- P. M. Mess: Handboek over de beenbreuken en ontwrichtingen (骨折及び脱臼教本). Leiden,
1853 1399 • 1523 • 2083
- A. W. M. Hasselt: Handleiding tot de leer van het militair geneeskundig onderzoek (陸軍々医学研究指針).
Utrecht, 1856 1153
- A. W. M. Hasselt: Handleiding der Vergiftleer (中毒学教本). Utrecht, 第2版, 1855 1730
- W. Vrolik: Beschrijving eeniger merkwaardige misgeboorten (注意すべき 2. 3 の流産例). Amsterdam,
1855 1519
- J. van Geuns, J. M. Schrant: Over buitenbaarmoeder-tijke zwangerschap (子宮外妊娠について).
Amsterdam, 1855 1518
- Halder: Radicale geneezing van het Klaauwzeer en rotkreupel der schapen (羊の蹄爪病と腐敗熱の根治法).
Alkmaar, 1856 2571 • 2572 • 2624 • 3394
-

錦小路家文書(二)

山崎佐

其二 典藥頭錦小路家文書

美濃判、墨付三十八枚、前書と同じかたい書体。全部に裏打をし、表紙も新しい。これは今度錦小路家から出た後に補修したもので、題箋の「典藥頭錦小路家文書」も今度書いたものである。

この本は前回全文を掲出した第一冊の控えか下書であつて、本文はほとんど同じで、まゝ用語が小異する。そして処々に第一冊に欠けた附記や注がある。今回は全文を掲出せずに第一冊と大きな差のある箇所のみを示すことにした。第一冊文書と対照されたい頁数は原本の丁附ではなく、前回印刷に附した本誌(第六巻第二号)の頁である。

本 文

天保二年

(二一頁下より二五頁上までの文と同じ、但し任官年月の記録中省略もあり、御藥調進の例は全く欠く)

天保四年

(二五頁下より二九頁上までの文にほぼ同じであるが、頭註や朱註は一切なく、二六頁下の切り取られた部分は左の如き文章である)

一 尙秀儀小森家江ヶ様ノ書付差出候也

口 述

今度尙秀相叶冥加堂上御取立被成下奉畏候

(二七頁下三行目の附記は第二冊では次の如くなつてゐる)

右一紙有之候上ハ尙秀差出候書付トハ大キ

ニ相違仕候

(二九頁上三行目の処より左の如し)

且上首頭下藤助拜任正徳四年ノ御定陽明切ノ事ニ

テ下略

天保六年四月廿一日

(この記事は第一冊より頗る簡単である)

同 四月廿三日

(二九頁下四行目に続いて左の文あり)

淡川病氣不能面会仍又息翌日篤度申入乎

同 四月廿七日

(この記事はなく、二九頁下七行目以下の記事は廿三日になつてゐる。以下三九頁下天保六年七月九日の記事まではほとんど同じ内容であるが、ただ贈答・饗応関係の記事は一切省かれており、次に余白をおいて左のような錦小路・小森両家の家系が記してある)

丹波氏 錦小路

高貴王

駒子

首

天 大国

重明 典薬頭、侍医
丹波権守

雅忠 典薬頭、施薬院使
正四位下、昇殿、禁色

志 志 志 直 住丹波国
賜坂上姓

弓 束

孝 子

康 康 頼 針博士、医博士、左衛門佐
従五位上、始賜丹波宿禰

忠 忠 明 典薬頭、侍医、丹波守
従四位下、改宿彌賜朝臣

重 重 康 施薬院使、侍医、凶書頭
従四位下

重 重 頼 施薬院使、侍医
凶書頭、従四位下

頼 頼 基 典薬頭、施薬院使
侍医、正四位上

頼 頼 季 典薬頭、施薬院使
正四位下

篤 篤 基 典薬頭、侍医、従三位、
昇殿、治部郷、施薬院使

篤 篤 直 典薬頭、従二位
昇殿

頼 頼 直 元幸基、昇殿
治部郷、正三位

定 定 基 典薬頭、施薬院使、治部郷
正三位、昇殿

盛 盛 直 典薬頭、施薬院使、刑部郷
従三位、昇殿

尙 尙 秀 凶書頭、従三位、典薬頭
美国久郷二男

頼 頼 理 典薬頭、中務大輔
正三位、修理大夫

基 基 康 典薬頭、主水正
従四位上

長 長 基 典薬頭、施薬院使
内匠頭、正四位下

光 光 基 典薬頭、施薬院使
従四位上、穀倉院別当

長 長 直 典薬頭、施薬院使
内蔵頭、従三位

重 重 直 典薬頭、施薬院使、治部郷
正四位上、昇殿

篤 篤 忠 典薬頭、治部郷、右京大夫
正三位、昇殿

秀 秀 直 典薬頭、侍医、大膳大夫
正四位下

頼 頼 庸 典薬頭、侍医
右京権大夫

頼 頼 尚 典薬頭、中務大輔
正三位、修理大夫

丹 丹 波 氏 小 森

康 康 頼 重 明 忠 明 雅 忠 重 康 基 康 重 頼

頼 頼 基 長 基 季 康 忠 頼 忠 景 忠 行 頼 景

季 季 景 季 長 頼 豊 頼 秀 頼 量 頼 直 頼 景

賴慶 賴元 賴中 賴重 賴房 賴季 賴方
 賴亮 賴只 量亮 賴望 賴之 賴永

天保四年六月十九日

(三九頁下より四十頁下までの文に同じ)

天保五年十一月九日

高木下野守来今日牧高橋面会仕候処今度ノ一件

是ハ西大路家門番ノモノ醫師ト申分出来西大路家門
 内ニテ喧嘩ニ及金子ヲ醫師ヨリ相ムサホリ不法ノ儀
 有之候由途中ニテワリ木ヲモチ醫師アタマヲハリ路
 頭往来ノモノ見請候由ナリ此事相違ニテ当家ニテケ
 様ノ事ニ及候ト甘露寺ヨリ内言上ノ由高木ヨリ承之
 全相違ノ事ナリ右御糺シニ相成候トキノ事ナリ

是ノ一件ハ門番ノ妻ヲ醫師何角色情ヨリヲコリ
 候喧嘩ノイキサツト申事ナリ

(右の天保四年六月十九日及び天保五年十一月九日の記事は順序
 よく前の日附の処に入るものと思われるが、修理の際乱丁になつ
 たとみえて第二冊の冒頭と末尾に離れて綴じてある。今しばらく
 かりにここに掲げた)

以上第二冊文書全部終り

編集後記

本号は春の総会終了後、すぐに出す予定であつたが、会計が苦
 しく、見通しがつかなくなつたので、不本意ながら遅れてしまつた
 のは申訳ない。その代り、第七卷第一・二・三号合併の豪華特集
 号と共に発送したので、発行のおくれを一举にとりかえすと共に
 充実した論考を、読書の秋にさきがけてお手許にお届けできたの
 でお許しただければ幸いである。

昭和二八年以来、二期重任した理事長以下、役員全部が、会報
 のごとく七月の役員会の決定で、もう一期勤めることになつた。
 編集・会計・庶務ともまた幹事の石原・杉田両名でお引受けする
 ことになつた。まことに微力で御迷惑のみかけているが、せいぜ
 い御支援助いだきたい。

会誌の遅引を棚に上げて厚顔なお願ひではあるが、会費未納の
 方は至急払込まれたい。なお、会誌の原稿を募る。長短随意。
 第五九回総会は同封案内書の通り、大阪で来春開かれる。中野
 会長の労を多とすると共に、盛大を期待することや切。(石原)

日本医史学雑誌(第六卷・第四号)

昭和三十一年八月十日 印刷
昭和三十一年八月十五日 発行

編集兼 石原 明
 発行者 日本医史学会

印刷所 杉本紙器印刷株式会社

東京都板橋区大谷口七二四
 日本大学医学部内山生理内
 横浜市南区白妙町二ノ七



鉤虫, 蛔虫症に

バイエル
アスカリドール液

純アスカリドール2.5%を含有する芳香性ヒマシ油溶液で、良好な忍容性と強力な駆虫作用を有し、有効成分の含量が均一であるから、小児に対しても正確有効な投与量を定めることが出来ます。

液：(病院並びに集団服用) 500cc ¥4.900



製造元 ドイツ・バイエル染料薬品株式会社 ドイツ・レバークーゼン
輸入元 吉富製薬株式会社 販売元 武田薬品工業株式会社
大阪市東区道修町二丁目

(A87)

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the
Japanese Society of Medical History.

Vol. 6. No. 4.

August, 1956

CONTENTS

Original articles

- Some aspect of the medical education in around
Genroku era. Mitsutaka Irako (1)
Studies on the life of Shōzen Kajiwara and his work (2)
(1265~1337, Great doctor in Kamakura era)
Akira Ishihara (7)

Special Report

- Old library catalogue of Dutch medical book on "Bansho
Torishirabesho" Ranzaburo Ohtori (31)

Literature

- Document of Nishikikoji family (Head Imperial official doctor
in Japanese middle Ages) vol. 2.
Tasaku Yamazaki (36)

Book review (29)

News (29)

The Japanese Society of Medical History

(Department of Physiology, Nihon University, School of Medicine.)

Itabashi, Tokyo, Japan.